

中村 フォスタリングについての専門講座をやっていることの還元としての企画でした。来年度も募集します。現在そういう任についている方はもちろんそうなのですが、私としては里親さんも来てほしいのです。さらに里子さんも里子経験した人もいいなと思っているのです。まだ里親さんは受講できていませんが、当事者として講師にお招きしています。とりあえず現在はその任についている方々を対象にしています。

当事者の話を講座にずいぶんと入れています。エピソードを紹介します。ひとつは里子さんで実親との関係をどうするかという論点です。私は里親と実親はもっと関係を取るべきだと思います。なぜならばそこには子どもがいるからです。両方を知っている子どもがいます。子どもの決断が尊重されるべきでしょう。子どもから見ても里親も実親も自分の親なので、たとえ実親が刑務所に行っても、親と関係をつけたり現実を知ることは大事なことです。勝手に制度が実親との関係をつくるなどというのはおかしいです。その里親さんは実親との関係をつけている方に話をしてもらいました。なぜならば、その里子が親を気にしているから。そうしたら実親さんが里子に「この里親のお母ちゃん、いいで」って言うてくれてるんです。里親はとってもいいお母さんだと里子が言うてくれているんです実親に。そうしたらその実親が、「私もあんたみたいな親が欲しかった」って言ったのです。その実親は刑務所に出入りしているんだけれども、虐待家族に育っているの親に恵まれなかったのです。そうしたら子どもの話を聞いていると、いいなあその里親って。そんなやり取りができるのがいいなと思っているのです。

ですから実親との関係をつけて実親指導をするとかいうのは、とっても理に適ったやり方だなと思います。なぜならば子どもの権利だからです。実親とどう関係をつけるかというのは子どもが決めることなのです。社会や国家が勝手に決めたらいかんと思うのです。今は残念ながらそうになってないです。でも現実はその親たちなのです。というのがとても感銘を受けた当事者の話でした。

もうひとつは、里親・里子が終わると特別養子縁組に切り替わっていくとい

う制度や意向があるわけです。今まで6歳までだったのが引き上げられました。これ私はやっぱり家族主義、血縁的家族主義、疑似血縁的家族主義が日本の中にあるなと思う面があります。そこで特別養子縁組の養子さんの体験を聞く機会を講座でもちました。これは真実告知がうまくいかなかった例なんです。

真実告知がうまくいかなかった例があって、これは私がやっている虐待親のところにも来るんですけども、虐待親のグループになっていま虐待している親なのだけでも、その親が小さいときに里子として育てているのですけれども、これは本当に父親、里父がよくないのですけれども、里子が悪さをするとか非行に走るとか勉強できないというようなことになると、「やっぱりお前は」っていう言葉が出るらしいのです。これは最悪ですよ。最悪です。突然のように、「懲罰のように真実告知」がされるという例に出会いました。これは本当に最悪です。里親教育ができてないからなのです。親とは何かのはき違いです。

こんなことを体験していると、自分でいろんなストレスフルなライフストーリーを描くことになります。ライフストーリーをどう作っていくかということについて、きちんと親への支援ということが、実親、里親両方ないと。それから日本の場合は血縁家族主義がとても強いので、特別養子縁組主義に回収されていくなと思うとすると、その人たちの選択なので自由だと思いますが、やはりライフストーリーワークが重要となります。私の個人的な意見はすべての親は里親であると思います。いつまでも子どもを囲い込むなということだと思っています。社会的養育の仕組みは、すべての親は社会的親になっていった方がいいのかなと私は思って、極論風に言っています。変ユニバーサルなテーマがここにあるなと思います。来年度も募集しますのでぜひ応募してきてください。